

## 「松坂の一夜」における事実の美学化の問題

「松坂の一夜」執筆が、佐佐木の一貫した展望のもとに具現化されたものであることは、佐佐木が明治末年から大正、昭和にかけて執筆・改訂していった『日本歌学史』、さらに大正から昭和にかけて執筆・改訂されていった『和歌史の研究』に照らして、より明確なものとなる。

これらの書物は、まさに、文献学的に和歌史を展望し直した書物であると同時に、その展望を戸田茂睡および契沖を画期とした「国学」によって描き出したものであり、まさに「近代国学」を文献学的に再編する体系を示した書物である。佐佐木は、すでに『排蘆小船』の発見以前から、それ自体が新たな国学の再定義（藤田大誠氏のいう「近代国学」）であるような書物を改訂しつつ仕上げてきたのであった。

だが、すでに 014 稿で述べたように、「松坂の一夜」以前の佐佐木は、なお江戸の古い「歌学」を中心とした国学観から十分には解き放たれてはおらず、宣長を核とした歴史を構想してはいなかった。

ところが、「松坂の一夜」を通じて佐佐木が示したのは、国学の最重要テキストは『古事記』にきわまるという宣長の主張への加担であった。

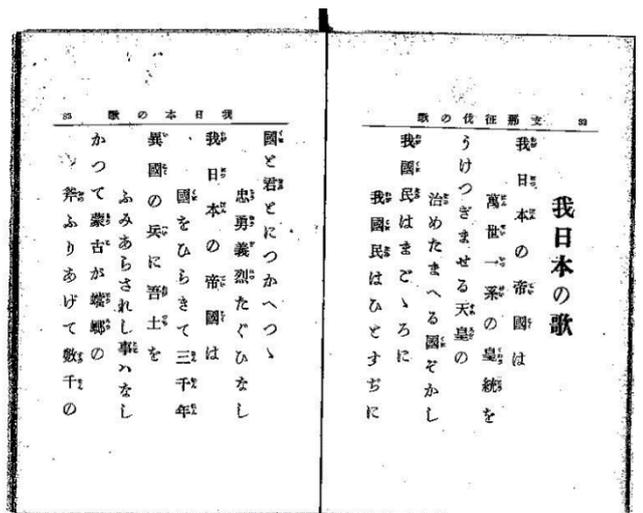
そして、「国典」としての『古事記』の重要性が、その内容そのものによってではなく、美しい師弟間の学脈の継承物語によって、情緒的に、ごく自然に受容されることになったのは、国学史の問題として以上に重要な意味を持ったのである。

「情緒的に、ごく自然に」というのは、ことが美談の物語——年長の学者の謙遜と少壮の学者の情熱の出会い——として編成されたことによる。

佐佐木が「松坂の一夜」を通じて印象的な<絵>を描いたことは、すでに書いたが、その<絵>の美しさが話の美しさを際立たせているのであり、また、話の主題である学問への謙虚さと情熱の美しさを印象づけてもいたのであった。つまり、この物語は、<絵>という視覚的なものを通じて、精神的な美しさへと人の目を向けさせる効果をもっているのであり、それは意図されたものであろう。

ちなみに、佐佐木信綱は、明治 27 年（1894）、22 歳の折に、博文館から『支那征伐の歌』という歌集を出しており、これは非常に過激な戦意高揚のためのメッセージを歌の形にして表現したものである。

その歌を美しいとは思わないが、しかし、歌という文学の形式をとって戦意高揚を図るという行為は、近代国家における「政治の美学化」に当たる問題である。



佐佐木信綱、『支那征伐の歌』、明 27 年、博文館刊。

画像出所：国立国会図書館デジタルコレクション。

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/873478>

私の場合「政治の美学化 l'esthétisation du politique」という概念は、フィリップ・ラクー＝ラバルトの著作 *La Fiction du politique: Heidegger, l'art et la politique*, Bourgois, 1988 (浅利誠、大谷尚文訳『政治という虚構——ハイデガー、芸術そして政治』、1992年、藤原書店刊) をもって知ったのであるが、田野大輔氏の研究『魅惑する帝国——政治の美学化とナチズム』(2007年、名古屋大学出版会刊) によれば W.ベンヤミンに発するものらしい。田野氏の整理によれば、国家を作品と見る思考が政治の美学化をもたらすということになる。

佐佐木の出発点に「歌」をもって政治に相渉ろうとした過去のある事は見逃せないわけで、佐佐木の学問には当初から、文学を政治の美学化の道具にする志向が潜在していたことを物語る。「松坂の一夜」という「小篇」ではそれが顕著に現れたというべきであろう。

横道にそれるが、関連のある話題としてファシズムの独裁者たちが映画芸術を重視したことはよく知られている。それはドイツ、ソ連、北朝鮮に限ったことではなく、他ならぬ戦前の日本がそうであった。

これは論証ではないことを断っておくが、黒澤明が第2次世界大戦末期にあたる1944年に監督第2作として制作した作品『一番美しく』が、軍需工場で働く女子挺身隊員達が国家のために女も男と同等の貢献を果そうという精神を示し、奮闘する姿を美しい滅私奉公の物語として描いたのは、まさに歴史に残るファシズムの美学化の〈絵〉であった。黒澤が作品に『一番美しく』という題をつけたことは極めて象徴的なことで、こうしたことは、私には哲学的分析以上の重みをもって感じられる。黒澤の手腕は〈絵〉による美の視覚化によって精神的な美を具現せしめるのである。この志向は、実は、黒澤の全作品を貫徹する思想でさえあると言ってよいほどである。いずれにしても、黒澤が美には魔的な魅力があり、それが人の心を貫くことを弁えたうえで『一番美しく』という国策映画を製作したことはまちがいない。

ともあれ、事実というものは、たいてい散文的なのであって、江戸に生きた宣長と真淵をめぐって残された facts を列挙していった時に浮かび上がってくるものは、必ずしも佐佐木の描いた〈絵〉にはつながらないのである。

①宣長は宝暦7年(1757)10月、28歳の折に京都への留学から松坂に帰郷し医業を開いたが、帰郷後間もない時期に真淵の著『冠辞考』を入手、最初はその内容を奇怪に思い信ずる気にならなかったが、繰り返し読むうちに「いにしへぶりのこゝろことば」についての真淵の説に敬服するに至った(「おのが物まなびの有しやう」、「玉かつま二の巻」、『玉勝間』、筑摩版『本居宣長全集 第1巻』、p.85)。

②宣長は宝暦11年(1761)3月に『阿每菟知弁』(筑摩版全集第14巻所収)を著わし、「天地」の古訓を考証、そこで「如万葉集為足徴古言、尚不得不謂阿每菟知也」(万葉集の如きは古言を徴するに足ると為せば、なほ「阿每菟知」と謂はざるを得ざるなり。)と書いており、『万葉集』を「古言」を徴する書として扱う方法を確立していることが分かるが、その年の5月には初めて『万葉集』を開講している。

③宣長が日記に「廿五日、曇天 ○嶺松院会也 ○岡部衛士当所一宿【新上屋】、始対面」と記した会見のなされた宝暦13年の末に宣長は真淵に入門、翌宝暦14年＝明和元年（1764）に宣長は真淵に対して『万葉集』についての質問を開始した（筑摩版全集第6巻「解題」p.26参照）。明和元年から5年6月まで続いた質疑応答は『万葉集問目』として成書化された（筑摩版全集第6巻所収）。結局、6年間の交流の中で師弟が交わした書簡の内容は主として『万葉集』の解釈についての質疑応答であった（筑摩版全集第6巻、p.27参照）。

また、本ウェブサイトの原稿「012 近代における国学の再定礎と契沖への評価－その2－創作文学としての『松坂の一夜』」を参照のこと。

④明和5年には『続日本紀』の宣命についての質問を開始した。宣長は『古事記』についても質問するつもりだったが、明和6年10月に真淵が73歳で他界したためそれは果されなかった（筑摩版全集第6巻、p.15参照。）

⑤上記の『万葉集』に関する質疑応答とは別に、宣長は真淵の『万葉集』の巻の論を論駁する内容の『万葉集重載歌及巻の次第』を真淵に書き送った。

このように、もともと宣長が真淵に入門する動機の出発点は『万葉集』の枕詞論たる『冠辞考』にあったのであり、入門後も真淵の往来のほとんどが『万葉集』に関する議論であったことを見れば、佐佐木の筆にかかる「松坂の一夜」において、宣長がいきなり『古事記』の注釈の計画について真淵の見解を聞こうとしたように描かれているのは以下にも不自然で、無理筋であるように私には思われる。

2020年3月29日 研究代表者 西澤 一光